

令和8年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 令和8年4月14日（火）

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立浜川小学校

国 語

(1) 定着状況（観点別平均正答率と全国正答率との比較）

	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
知識・技能	90.6 (△3.7)	87.3 (△7.3)	77.6 (△1.0)	79.4 (△6.1)	71.5 (△7.6)
思考・判断・表現	71.0 (△6.5)	74.2 (△5.8)	70.8 (△4.7)	66.5 (△5.6)	67.1 (△7.5)

(2) 具体的な課題・原因

2～6年生までどの観点でも全国正答率を上回ることができた。物語や説明文の内容の大体を捉えたり話の中心に気を付けて聞いたりすることは、正答率が高い。しかし、文章を書く問題についてはどの学年においても正答率は低く、課題が残る。漢字の書き取りや言語の問題も苦手な児童が多い傾向にある。

【2年生】

問題文のどこに注目して情報を得れば良いのか分からず、答えることができない問題があった。前後の文しか読まず、内容理解が浅いま問題进行を解こうとする傾向がある。

【3年生】

漢字の書き取りはできていたが、読みができない児童もいる。記述式の問題に課題があり、語と語や文と文の続き方に注意しながら文章を書く問題に誤答が多い。

【4年生】

漢字の書き取り問題では、送り仮名の習熟に課題が見られた。文章を書く問題では、いくつかの条件に合わせて書くことができない児童が多い。

【5年生】

文章の中で、修飾語がどの言葉を詳しく説明しているのか捉えられていない。主語と述語の違いも曖昧な児童も多い。文章を書く問題では、どのように書いたらいいか分からず無回答もあった。

【6年生】

漢字の書き取りに誤答が多くあった。文章を書く問題では、どのように書いたらいいか分からず無回答もあった。

(3) 課題解決のための方策

漢字の習熟を図るためにことのはノートだけでなく、小テストやミライシードに取り組んでいく。日常の文章でも漢字を使うことができるように継続して指導していく。浜川タイムを活用して、言語に関する問題や条件に合わせて文章を書くことにも取り組む。

【2年生】

言語に関するプリント学習を週に一回取り入れていく。物語や説明文では、内容の大体を捉えるだけでなく、細かい言葉にも着目して、内容の理解を深める。

【3年生】

漢字を書くだけでなく、読むことにも焦点を当てて習熟を図っていく。時間内に書き終わらない児童もいたため、時間を意識して文章を書く練習をしていく。

【4年生】

漢字の書き取りでは、送り仮名を意識して習熟できるようにしていく。浜川タイムで、条件に合った文章を書く活動を取り入れていく。

【5年生】

物語の学習の際にも、「どんな」「どのように」「いつ」「どこで」などの言葉を見つけてサイドラインを引き、修飾語への理解を深める。文章を書くことに慣れていない児童もいるため、短い文を書く経験を多く積ませる。

【6年生】

タブレットで文章を書くことも増えているが、タブレットを使用するのは下書きや構成のみに使用し、手書きで書く力を身に付けさせる。

社 会

(1) 定着状況（観点別平均正答率と全国正答率との比較）

	4 年	5 年	6 年
知識・技能	75.5 (△3.1)	72.2 (△6.8)	76.1 (△6.6)
思考・判断・表現	60.2 (△3.9)	74.3 (△6.6)	72.8 (△7.6)

(2) 具体的な課題・原因

【4年生】

「安全なくらしー事故や事件」

- ・複数の資料を関連付けて考えることが課題。→複数の資料を関連付けて読み取る機会が少ないことが原因。

「市の様子の移り変わり」

- ・資料を正しく読み取ることが課題。→言葉の読み間違いなど、読み取りが不十分であることが原因。

「くらしの移り変わり」

- ・昨年度同様に、校内の資料や品川歴史館などで実際に見たものは正答率が高く、実体験の伴っていない内容について誤答が多かった。→調べ学習等で補う。

【5年生】

「都道府県の様子」

- ・都道府県に関する問題の正答率がとても高い。→どの問題も全国平均を 10%以上上回っている。4年生での学習がしっかりと身に付いている。今後も学習の中で都道府県と関連付けながら展開していく。

「特色ある地域の様子」

- ・特色ある地域の様子を資料から読み取る問題の正答率が高い。→4年生の学習の中で資料の読み取り方をしっかりと理解している。今後の授業でも資料を活用して、指導することを継続していく。

「自然災害からくらしを守るー地震」

- ・地震に備えた地域の取り組みについて考える問題が唯一全国平均より低い。→防災センターの人の話から、地域での防災対策を自分事として捉えられていないことが原因。

【6年生】

「日本の水産業」

- ・日本の主な漁港と水揚げ量についての資料を読み取ること。→知識の定着や資料を読み取る力が不十分であることが原因。

「情報を生かした産業」

- ・さまざまなメディアの特徴について理解すること。→知識の定着が不十分であり、記述式の問題に不慣れであることが原因。

「自然環境と国民生活」

- ・自然環境を守る取り組みについて、適切な資料を判断すること。→文章問題を正しく読み取る力や学習したことを基に考える力の不足が原因。

(3) 課題解決のための方策

【3年生】

- ・グラフや表、写真など、様々な資料を活用し、情報を読み取る力の定着を図る。
- ・資料から読み取れることを考えて発表する活動を意図的に取り入れていく。
- ・調べ学習の際にジグソー学習等を取り入れ、自分の調べていない事項についても知識を共有し合う。

【4年生】

- ・都道府県をしっかりと身に付けさせ、様々な学習で関連付けていく。
- ・グラフなどの資料から読み取れることを共有する時間をとり、苦手な子も読み取る力を身に付ける。
- ・学習時に自分事として捉えられるように意識させ、すべての学習が身近なことであると認識させる。

【5年生】

- ・実際に見学することのできない事象については、ICT 機器を活用し、動画や資料を通して知識を補うことができるようにする。
- ・学習した知識を自分の生活と結び付けて考える習慣付けを行う。
- ・問いに正対した資料を選択する力を身に付けることができるようにする。

【6年生】

- ・学習した知識を生活と結び付けて考え、定着させていく。
- ・様々な資料が何を表しているか読み取り、自分たちの生活と関連付けて考えることができるようにする。

算 数

(1) 定着状況（観点別平均正答率と全国平均正答率との比較）

	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
知識・技能	87.6 (△4.8)	80.1 (△2.7)	83.1 (△6.8)	74.0 (△7.0)	78.8 (△7.6)
思考・判断・表現	67.3 (▼2.2)	67.8 (△3.2)	69.7 (△10.9)	55.1 (△8.3)	64.8 (△8.7)

(2) 具体的な課題・原因

本年度は、ほとんどの学年で正答率の平均が全国平均正答率を上回ったが、2年生の「思考・判断・表現」が全国平均正答率を下回った。

目標値に対して課題が見られた内容は、以下の通りである。

【2年生】異種の量の文章問題を図に表すこと。使われている色板を数えること。示された加法の式から適切な文章問題をつくること。

【3年生】分数の意味理解。2けた＋2けた＝3けた（繰り上がり2回）の計算。直角三角形の特徴理解。特定の位の数字を比較することで数の大小を判断できることを説明すること。

【4年生】十進位取り記数法の理解。

【5年生】身近にあるもののおよその面積を推測すること。平行四辺形の作図。

【6年生】小数第1位×小数第2位（乗数に空位あり）の計算。小数の除法の文章問題を表した図の構造をとらえること。

(3) 課題解決のための方策

- ・問題文を読むときに大事なところや問題文から分かることと聞かれていること（問い）に線を引くようにして、問題に対する考え方や答え方を低学年の段階から繰り返し指導する。多くの文章題に触れ、問題を自らで作る活動を取り入れていく。
- ・何を問われているかを自分の言葉で言い直したり図や絵に表したりするなど、問われていることをイメージしてから問題に答える習慣を付けさせる。また、図形に補助線を引く、問題の場面をテープ図や関係図に表すなど、問題解決の手法を教え、自らに合った手法を選択し使えるようにする。
- ・繰り下がり、繰り上がりの計算、数直線上の分数の表し方、小数のかけ算における小数点の付け方等、児童のつまずきや定着の困難さが予想される内容は、意味をしっかりと理解させるとともに、定着するまでは補助数字・記号の書き込みをするなどして丁寧に問題を解かせる。
- ・低学年のうちから図形や立体に直接触れる時間を確保し、体感して面の形や辺の関係性を理解させていく。面積や体積の量感は、身近な物の測定を繰り返しながら培っていく。「直角」「平行」などの算数用語は、身体表現を取り入れるなどして意味の確認をしながら理解させていく。
- ・定規、分度器、コンパスなどの使い方の動画見て、繰り返し道具を使う機会を設けることで使い方を正しく身に付けさせ使いこなせるように指導する。
- ・自分の考えを言葉や式で表現する力を付けるために、発達段階に合わせて、ペアで説明し合う時間を作り、理解を深める。高学年は言葉（算数用語）、数、式、図、表、グラフなどを用い、根拠をもって説明する機会を確保する。
- ・基本問題は、授業、家庭学習、放課後の補習などで類題を多く解かせ定着を図る。

理 科

(1) 定着状況（観点別平均正答率と全国正答率との比較）

	4 年	5 年	6 年
知識・技能	63.4 (△0.8)	62.5 (▼0.5)	64.0 (△2.0)
思考・判断・表現	63.1 (▼0.5)	55.4 (△0.3)	54.8 (△2.4)

(2) 具体的な課題・原因

正しい選択肢を選ぶ問題はどの学年も正答率が高い。しかし、図示がない問題になると問題文を読み込めていない、記述問題になると自分の言葉で表現することが難しく正答率が低い。問題の意図を読み取ったり、適切な用語を使ったりすることが定着できていないと考えられる。

【4年生】

ハウセンカの育つ順の理解の問題が低い。→生物を実際に見る、育てる環境がなかった。

虫眼鏡の正しい使い方が身に付いていない。→動かせるものと動かせないものの観察を分けて行う機会が少ない。

太陽の位置と影の問題が全体的に低い。→問題文とは違う実験方法のため、想像することが難しかった。外遊びの機会が少ないことによる経験不足。

【5年生】

おたまじゃくしの観察できる季節についての正答率が低い。→4年生と同様、生物を実際に見る、育てる環境がなかった。

1日の気温の変化のグラフの読み取り、骨のはたらきについて、結露についてなど、理由を記述することが難しい。→選択問題だけでなく、文章問題から連想をして言葉を思い浮かべることができない。記述する練習の機会が少ない。

【6年生】

種子の発芽条件、メダカの飼い方やたまごの様子についての理解の問題が低い。→4、5年生と同様、生物を実際に見る、育てる環境がなかった。

ふりこの長さによって1往復する時間が違うことを、図を見て説明することが難しい。→記述する練習の機会が少ない。

(3) 課題解決のための方策

- ・新校舎が完成したため、生物を育てて実体験ができる環境を整えていく。
- ・実体験ができなくても、日常生活でできることを伝えて、まずは触れてみる機会を増やす。
- ・自然に左右される单元等で動画を見せる際には、見せて終わらないようにする。定着を図るために使用したり、印象に残るような工夫をしたりして見せるようにする。
- ・実験を行う際にグループだけではなく、個人でもできるような道具の数の準備を行い、自分で触れられる機会を増やす。
- ・考察や振り返りを通して、理科の用語を使っていく。
穴埋め、キーワードを提示して書く、自分で考えて書くというように、徐々に個人でできるような書き方を提示する。

英 語

(1) 定着状況（観点別平均正答率と全国正答率との比較）

	6 年
知識・技能	85.0 (△2.7)
思考・判断・表現	80.9 (△3.0)

(2) 具体的な課題・原因

- ・音声と文字の認識が不十分な児童がいる。
- ・「E」「C」「T」など似ている音声の区別ができない児童がいる。
- ・「h」「n」「m」など似ている文字の識別ができていない児童がいる。
- ・大文字から小文字への書き換えやつづりを聞き取る問題はできている児童が多いため、単純に出題傾向に慣れていないことも考えられる。
- ・1 時間の授業の中で音声と文字認識をつなげる活動が十分に取り入れられていない。
- ・児童に個人差があり、英語に苦手意識をもつ児童や慣れ親しみが十分にできていない児童が一定数いる。

(3) 課題解決のための方策

- ・低学年の授業の中でも文字指導（音声と大文字）を取り入れる。
- ・比較的聞き取りが柔軟にできる低学年の学習活動の中で文字と音声をつなげる活動を取り入れる。
- ・中学年で小文字を取り扱う際、小文字体操を取り入れる。小文字体操を高学年指導にもつなげる。（歌・動作・字形の認識）
- ・パターン化した授業形態が有効である反面、慣れていない活動の際に正答を見付けられない児童がいるため、授業の流し方を検討する必要があるのではないか。